

HERBERT JHRERING

同感です。発展を歴史的にみつめるのにも、区わけは必要です。発展過程では、パントマイムと舞踊が密着していた段階があったのですからね。

MARCEL MARCEAU

そう、その通り。パントマイムはいろんな段階を通りました。ギリシャ人たちは漁師の物語をつづりました。そして無言劇はやがてモノをいうコーラスと結びつきます。中世になると、身ぶり役者は手品師なり曲芸師となって現れます。だからコメディア・デラルテではパントマイムはアクロバティックでした。十九世紀にはいりますと、道化のハレルキンとかコロンビーヌの役は、舞踊家か女のツナ渡り師が演じたのです。パントマイムとマイムの差異-パントマイムのほうはギリシャ、ローマの時代に、静かな劇芸術という形で在って、役者は言葉ぬきでコミカルな劇的筋を演ってみせたのです。ローマの名優といえばPylades, Bayllos, Bosciusです。ギリシャでは、筋をはこぶのにしばしばコーラス(歌と詩を伴う)がつけました。それは日本の能の先行形でした。中世では神秘劇やキリスト受難劇にマイムがあり、それはコメディア・デラルテの不死の仮面にうけつがれました。コメディア・デラルテというのは、舞踊と音楽とアクロバットからなりたつ演劇です。人物は、医者、老いぼれ道化、ハレルキン、道化人形(Pulcinella)、船長、召使い、などです。人物それぞれが独自のナマリを使って喋ったのです。というのは、こういう性格の仮面をつくりあげていったのがボロニア、ヴェニス、ナポリなどの諸都市だったからなのです。やがて主役はハレルキンとコロンビーヌということになります。共演の役者たちは、とにかく衣装で、登場した人物の性格が、異国の人たちがみても、すぐに判断でき、わかることをモットーにしました。この時代に、フランス、イタリア、イギリスなどの俳優、道化師たちはさかんに交流したわけですね。

P.50 「パントマイム芸術」 1971年第1刷発行 てすびす双書63 未来社
(原書1956年 Herbert Jhering・Marcel Marceau
"Die Weltkunst der Pantomime" Aufbau-Verlag Berlin)

